審査の結果の要旨

氏 名　アルメヘル クルシド シャイド

論 文 題 目　A Study on the Applications of Behavior Research in Architectural Design Practice
(建築設計実務における環境行動研究の応用に関する研究)

この論文は、建築計画研究(Architectural Planning Research, APR)ならびに環境行動研究(Environment Behavior Research, EBR)の問題意識と成果がどの程度まで、建築設計の専門家に対して届いているかを検証し、日本の建築設計の専門家、特に医療・福祉分野の設計者の研究に対する姿勢を調査して、研究成果への関心の状かを評価することを目的としている。

本論文は、６章より構成される。

第1章では、研究の背景、用語の定義、研究の限界・目的・方法を述べている。特に背景では、行動と環境の関係は社会科学(心理学、社会学、地理学、文化人類学)と環境デザイン分野(建築、都市、地域計画、インテリアデザイン)の研究者の関心を集め、我々は文化的枠組みの中に住み、ある時間と場所の人間・環境システムを共有しなければならないため、いかなるデザインも単独では存在しないという論点を示している。

第2章では、環境行動研究の海外での理論的発展と日本の建築計画研究の流れを示し、その相違点の分析を行ない、環境行動研究、設計に対する理論的研究と既往の研究、ならびに研究成果とデザインの関係についての考察をおこなっている。

第3章では、本研究を進めるに当たっての基礎的な問題点、理論的な特有性について考察している。ここでは設計者は、第一に研究成果を使用することに興味がない、第二に研究成果が設計に貢献し得る方法についてなじみがない、という二つの仮説を提唱している。言い換えれば、研究成果が最大限に利用されていない理由を示唆し得るのではないかということである。また、研究方法の詳細な議論がされている。

第4章では、調査内容・実施方法を述べている。研究の主題は本質的に質的な内容であるため、自由記述型質問や多数選択肢質問による自己記入形式のアンケート調査を採用して、建築設計の専門家を対象に郵送で行なっている。サンプルの特徴と調査方法についてはデルファイ法(Delphi Methodology)を用いている。アンケートは、1)研究成果を知っているか、2)研究成果の有用性、3)設計者の自己評価、4)研究への姿勢、5)基礎的情報5つの基本的な領域に分けている。

第5章では、調査結果の集計・分析と考察をおこなっている。アンケート回収率は、49%(183通)と高い。データのほとんどは順序的数字(ordinal number)で、数量的な値(nominal value)は極めて限られていたが、分析は一般の統計学的処理に従っている。いくつかの数学的モデルも用いられている。回答者の80%が、設計での一番の関心が「ユーザーニーズ」と述べており、このニーズを引き出すために用いた情報源と相関させて大多数が研究成果を如何なる情報源であれ利用していることを明らかにしている。3分の2が研究成果に関心を持ち、また3分の2が研究情報への簡単なアクセス方法がないと述べている。

第6章では、結論をまとめている。日本の医療福祉施設の設計専門家像は、1)極めて配慮深く、成熟した集団、2)積極的にユーザーニーズを配慮し、情報は好んで利用、3)研究の理論的側面の知識は欠如、という結論を導いている。また研究成果が届かない理由は、研究情報自体が設計者のニーズに合っていないためであり、設計者は、1)判断を助ける情報を好み、判断されることを欲しない、2)研究成果の定義と範囲の認識不足の解消は研究者側の責任、3)情報自体の意味は、背後の研究過程や方法論よりも重要視、5)設計者は研究成果の有無なしで決定しなければならないことを研究者が自覚する、6)設計の時間的制約により、信頼性が無くても情報を得る状況にある、7)設計者は棒グラフや言葉よりも絵やイラスト情報の方が受け入れやすい、8)研究者は成果の適切な評価手法がないため、評判や真実らしさが決定的になることを述べている。最後に今後の考慮点として、4つの視点を提案している。

以上のように、本論文は建築計画・環境行動研究の建築設計実務との関係について、実状調査と分析考察を通して基本的な知見を示し、建築計画学の発展に大きな寄与したものである。
よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。